

第16回「ちゅうでん児童文学賞」贈呈式のご報告

今回の応募総数は 152 作品で、ここ数年のなかで決して多い数字ではありませんでした。しかし、「例年以上に完成度の高い作品が多かった」という評価の声が、何名もの選考委員の方々から届き、見事に大賞作品も生まれ、4編の作品が受賞となりました。

また、複雑な家庭環境を背景に子どもの心の内側を描いた作品が多かった近年には珍しく、真っ直ぐに夢を追った物語、介護をテーマにした作品、壮大なファンタジーなど、ジャンルの幅が広がったように感じます。

2014年3月9日(日)には贈呈式・記念講演会を開催いたしました。その際の様子を、簡単にご紹介させていただきます。



理事長挨拶

まず最初に、当財団理事長の高原昌弘より、ご挨拶をさせていただきました。

第16回を迎える「ちゅうでん児童文学賞」を支えてくださっている選考委員の先生方、受賞者をはじめ、応募者の皆さまへの感謝の気持ちを、この場を借りて述べさせていただきました。



表彰状授与 (大賞を受賞した澤井美穂さん)



会場風景

次に、3名の選考委員の先生方から選評をいただきました。

<今江 祥智 先生>



さっきからずっとみていると、羨ましいですね。ぼくの時は、書こうとして、書いて、読む人もいなくて、また書いて、同じことを繰り返して、また書いて、ということやっていました。それは何十年か前なんですけども。それと比べたら、こんなに人が集まって、笑顔で拍手をしてもらって、賞金までもらえるんですから(笑)

本当に書きたいものがあれば、何枚でも書いたらいい。5枚でも10枚でも100枚でも1000枚でも。

この後、講演会らしきものがありますので、詳しくはそちらでお話しします。

<長田 弘 先生>



この賞の一番の特徴は、大賞になった場合、本になるということです。ですから、選考の場合、「出版に値するかどうか」ということに焦点が絞られます。

受賞すると、こんどは出版社の編集者と著者との間でいろいろなやりとりがあるでしょう。例えば、昨年度の作品でいうとタイトルが変わりましたし、絵や目次がついたり、こういう表現はどうかとか、そういったやりとりがあったでしょう。

このように、受賞と同時に、原稿が本になっていく過程を経験できるということが、この児童文学賞の非常にユニークなところではないかと思います。

これから応募される方は、「自分の作品が出版に値するだろうか」というようなことも念頭において書かれると、また、自分の書きたい言葉の選び方、探し方というものが変わってくるのではないかと思います。

今回選ばれた大賞作品も優れた作品ですが、洗濯でいえば洗いが終わったところです。来年までに、新しい本となって世に出ることを期待しています。

<鷺田 清一 先生>



今回、生まれてはじめて「児童文学」というものの選考にあたらせてもらいました。

選考では、書き手がどういう方か一切選考が終わるまでわからないものですから、どういう人かなあと想像しながらやらせていただきましたが… 今日お会いして、びっくりしましたのが、

若手でもなければベテランでもない、「ちゅうでん児童文学賞」といいますか、「ちゅうねん児童文学賞」という感じで… (笑)

児童文学というのは、いずれあるいはもうすぐ大人になっていく、そういう途中の子どもたちに読んでもらう文学で、子どもたちに、これだけは絶対に手放したらダメだぞ、絶対に覚えておかないとダメだぞという、本当に大事なことをしっかり伝えるというのも児童文学の役割だと思んですが、それだけではやっぱりよくない。つまり、そんなお利口さんで、キチッと型にはまった大人になって、身動きできない人生を送ってもらっても困るわけで、嘔みきれないこと、割り切れないこと、モヤモヤしていることやイライラしていること、そんな不安定さを、大人になっていく時に上手く持ち越して行って欲しい。そういう不安定さがあってもいいんだよと伝えることも、すごく大事なんだと思います。

そういう意味で、今回の選考にあたり、私は、あまりキレイにまとまっている話や大人が積然とする話だけじゃなくて、子どもあるいは少年少女にはどこか分からなさみたいなものがある、そういう厚みのある作品を入れさせていただきました。

受賞者の方々からもお言葉をいただきました。

【大賞】 澤井美穂さん 作品名『赤いペン』



この文学賞にはおそらく7回くらい応募しているんじゃないかなと思います。今回大賞をいただいて、本当に嬉しい気持ちでいっぱいです。今日は、私がどういう気持ちで書いていたかということ、ちょっとだけお話しさせていただきます。

「人は物語でできているんじゃないか」、そんな風に思ったことがありました。それをお話という形で表現できないかなと、いくつか作品を書いてみたんです。今回受賞したのは、そのうちの一つです。

「人は物語でできている」というのは、人はたくさんの物語からできていて、例えば、傍目から見ると大変そうな人が、本人はそれほど辛いと思っていなかったりする。これってどうしてなんだろうと思った時に、傍目で見ている人がその人を見て作り上げる物語と、その人が自分はこうなんだと思っている物語と、そこの差なんじゃないのかな、と思ったんです。

現実結構厳しくて、その現実を打開していく力というのはその人その人の持っている物語なんじゃないか、それを作品にできないかなと。そう思って作品を書いていきました。

去年から、家族の病気だとか、子どもの受験だとか、仕事の忙しさとかいろいろあって、今年を書くの諦めなくてはと思っていました。けれども、書き始めてみると楽しくて楽しくて、もうちょっともうちょっとと思っているうちに、8月に完成させることができました。

受賞の連絡をいただいた時は、「神様って本当にいるんだな」と思ったんです。上手く言えませんけど、私にくっついてるのは‘物語の神様’なんじゃないなかって。これが私が信じている物語です。

下読みの段階から関わってくださった方々、審査員の先生方、私の作品を読んでくださり、本当にありがとうございました。

【優秀賞】 飯沼晶子さん 作品名『はじまりは朝のカーテン』



今回は、優秀賞をいただけて本当にありがたく思っています。

私は大学を卒業してから東京で社会人生活を始めて、東京都内の公立中学校で社会科を教えていました。その後、フリースクールや、いろいろな形で教育現場に携わってきて、そこで知り合った多くの子どもたちや先生方、また、約20校近くの学校で教えてきましたが、それぞれの学校のいろんな匂いや職員室の雰囲気、様々なことを思い出しながら今回書かせていただきました。

今回のお話は、不登校になってしまった女の子のお話です。私の東京での生活と、生まれ故郷である富山県で過ごした約19年間の、とても器用とはいえない、昔の自分を思い出しながら書きました。その頃の不器用さも今に繋がっているのなら、報われたのかなと思っています。

ちょうど2週間前、東京から大阪に引っ越したんですが、これから大阪で知り合う人たちとの出会いや時間を自分の中で消化しながら、また読むに値する児童文学を書いていきたいなと思っています。

今回は、審査員の先生方に自分の作品を読んでいただけたことも、本当に感激です。どうもありがとうございました。

【優秀賞】 泉田もとさん 作品名『イヅナ』



本日はどうもありがとうございました。

今回、優秀賞をいただいた『イヅナ』という作品は、人につくツキモノのイヅナという魔物と、そのイヅナを使って商売をしているイヅナ使いの少年の、ロードムービー風のお話なのですが、応募をした後に、この賞で大賞を受賞して出版された本を読んでもと、

私の書いたものと全然ジャンルが違う作品ばかりだったので、見当違いのところに応募してしまったのではないかと思っていました。ですから、受賞のお知らせをいただいた時は本当に驚きましたし、とても嬉しかったです。

驚田先生のおっしゃったように、もう中年の後半にさしかかっている私なんですけれども、この間のソチオリンピックで、7度目の挑戦にして銀メダルを獲得した葛西選手のように、私も諦めずに、これからもコツコツと作品を書いていきたいなと思っています。

本当に今日はありがとうございました。

【奨励賞】 日高博さん 作品名『空も飛べるはず』



今回、受賞の連絡で「奨励賞ですよ」と言われた瞬間、「あれ、そんな賞ってあったかな」と思いました。わざわざ今回、このような賞を作っていただき、本当にありがとうございます。

奨励賞というのは、これからも努力し、激励を込めて賞を贈るという意味だということを知りました。まさにこれからの僕の

ための賞なんだなと思って、本当に嬉しく、今日ここに来ました。

私は54歳なんですけれども、このように素晴らしい表彰式のステージに立つのは生まれて初めてで、表彰状なんていうものは子どもの頃から1枚ももらったことがなくて、それも今回ギリギリ滑り込ませていただいて、本当に嬉しく思っています。

埼玉の家を出る時、中学2年の息子に「父ちゃん賞とったから、お前も一緒に行かない？」と聞くと「行かない」と…。息子は今中学2年なんですけど、一切僕と口をきいてくれません…。

2000年に『ビビンバ家族』というエッセイを書きまして、その第2弾をなかなか書けずに今までいました。今回は、『空も飛べるはず』という、半分本物の話で半分フィクションの作品を書かせていただいたんですけど、子どもたちがワクワクするような「夢」をもう一度書いて、いつか出版してみたいなと思っています。でもまず次は、その、口を聞いてくれない息子をテーマに、応募したいと思います。

贈呈式の後には、今江祥智先生による『子どもの本の海で泳いで 50 年』と題した記念講演会を開催いたしました。



大学を卒業して、名古屋にある中学校で英語の教師として暮らしていた時、その中学校で図書係になったことが、児童文学の世界へ踏み出す第一歩となったそうです。ご自身の、児童文学と共に歩んだ 50 年のお話を、たっぷりお聴かせいただきました。

平成 26 年度「第 17 回ちゅうでん児童文学賞」の作品募集も始まりました(締切:8 月 29 日[金])。全国の書き手の皆さまからのご応募を、財団スタッフ一同、心よりお待ちしております。

2014 年 4 月 吉日
(公財) ちゅうでん教育振興財団